様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13101
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520317
研究課題名（和文）ソ連非公式芸術とジャズ文化――
創造の場とネットワーク形成に関する研究
研究課題名（英文）Soviet Unofficial Art and Jazz Culture:
Research on a creative place and network formation
研究代表者
鈴木　正美（SUZUKI MASAMI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：10326621

研究成果の概要（和文）：
1950年代後半～1980年代のソ連や中欧において独自の発展を遂げた非公式芸術（非公認芸術）とジャズ文化の密接な関係およびアンダーグラウンドで生まれた創造の場と人的ネットワークの形成に関して現地調査行い、基礎資料を収集し、それらをもとに研究を重ね、研究会および一般公開のシンポジウムを開催した。これにより旧共産圏社会における芸術文化の特質と機能がかなり明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
We made the field survey about close relation of unofficial art (nonconformist art) and of jazz culture which developed uniquely in the Soviet Union and Central Europe of second half -of 1950 s - 1980 s., and about the creative place and the formation of a human network which were born in underground. We collected data and continued to research based on them, and held some conferences and the symposium of general public presentation. Thereby, the feature and function of art culture in the old Communist bloc society became considerably clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：外国文学、芸術諸学、比較文学、芸術史、非公式芸術

１．研究開始当初の背景

本研究は、基盤研究（C）「20 世紀後半のロシア・中欧における非公式芸術の総合的研究」（平成 18 年度～20 年度）をさらに発展させるべく計画された。先の研究は従来ないまったく新しいものであり、研究は大きな成果を得た。多くの資料を収集し、非公式芸術に関わった多くの人々と知己を得たことで、さらに次の研究への礎を築いたことは確かである。そこで本研究はこれらの物的・人的資

産を有効活用し、さらに研究を発展させることを目指した。

先の研究では多くの資料を収集したが、それだけではまだ不十分であり、さらに資料の収集を必要とした。また、多ジャンル融合の視点から研究することがきわめて重要であるとの認識から、諸都市に存在した非公式芸術やジャズ関係者の地下ネットワークを調査する必要があった。非公式芸術とジャズ文化を同時に研究することによって、諸ジャンル間の関係性が明らかになると考え、現地調査をさらに継続することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、1950 年代後半～1980 年代のソ連や中欧において独自の発展を遂げた非公式芸術（非公認芸術）とジャズ文化の密接な関係およびアンダーグラウンドで生まれた創造の場と人的ネットワークの形成を調査・分析することで、旧共産圏社会における芸術文化の特質と機能を明らかにすることにある。当該研究では、（１）多ジャンル融合、（２）地下ネットワーク、（３）公式芸術と非公式芸術の横断、という３つのテーマを核にし、以下のように研究する。

（１）ソ連や中欧における非公式芸術は、美術、文学、音楽、映画、演劇等のさまざまな芸術ジャンルの間での交流が盛んであったことが大きな特徴である。リアノゾヴォ派やモスクワ・コンセプチュアリズムのように、画家、詩人、音楽家などが連帯し、創造的グループを形成した。画家であると同時に詩人であった芸術家は数多い。詩人であっても本業はアニメーションの脚本家であった者、音楽家でありながら画家としてもすぐれた作品を残した者もいる。詩人と音楽家のコラボレーション、アニメーションや映画におけるジャズ音楽など、どれも複合的に絡み合っている。このように多ジャンルが複合的に融合した非公式芸術に関し、調査、分析する。

（２）1960 年代後半および 1980 年代、ソ連、中欧では多くのジャズ・フェスティバルが開催された。モスクワやレニングラードばかりか、タリン、リガ、ヴィリニュス、クイブイシェフ、アルハンゲリスク、ノヴォシビリスク、ドネーツク等の地方都市、さらにプラハやワルシャワのジャズ・フェスティバル主催者やジャズ・クラブ関係者は、密接なネットワークを結び、情報交換を行うだけでなく、音楽家たちは各フェスティバルを巡り、出演した。各々がサミズダートで音楽誌を出版していた。同じように、各都市の非公式芸術家たちもまた様々なネットワークを結び、相互に刺激し合った。こうした芸術家たちはジャズやロックの音楽によって結びついていた。このような地下ネットワークについて調査し、複雑な人間関係から生まれた非公式芸術の社会的特質を明らかにする。

（３）非公式芸術家たちの多くは、日常的には公式の職についており、芸術とはまったく無縁の仕事で収入を得ていたか、あるいは、公式的な芸術の仕事に携わりながらも自宅では非公式の前衛的作品を創造していた。イリヤ・カバコフのように絵本の挿し絵を描いていた者、クリョーヒンのようにエストラーダやレストランで演奏しながら仕事の後の深夜に前衛的な演奏をしていたジャズ音楽家たち、マルトゥイノフのように民族音楽や中世音楽の研究をしながら自ら現代音楽を作曲し続けた者など、公式と非公式の芸術活動は常に横断し、あるいは融合していた。このような公式芸術と非公式芸術の横断について調査し、両者間の運動のダイナミズムについて考察する。

以上３つのテーマは密接かつ複合的に関係している。本研究ではこれらの多面的アプローチを通して、中欧を含めた旧ソ連圏の非公式芸術とジャズ文化におけるさまざまな関係性を究明し、旧ソ連圏の文化の独自性を明らかにしようと試みる。

３．研究の方法

まず、研究代表者である鈴木正美を研究の統括者として、メンバーを下記のようなグループに分け、それぞれの領域で研究を進める。

（１）多ジャンル融合研究グループ
　　鈴木正美・レートフ・スホーチン
（２）地下ネットワーク研究グループ
　　岡島豊樹・ギュスティス・木村英明
（３）公式芸術と非公式芸術の横断研究グループ　梅津紀雄・大井弘子・鈴木正美

（１）のグループは、1950年代後半～1980年代のソ連において非公式に展開した前衛芸術を扱う研究グループである。非公式芸術の研究は主に美術を対象に行われており、文学、音楽、映画、演劇等のさまざま芸術ジャンルの間での交流が盛んであった非公式芸術の全体像はいまだに不明である。各ジャンルは密接に関連し合い、相互に刺激を受け、あるいは融合してまったく新しい表現を生み出していった。それは旧共産圏の文化の特徴を如実に表したものばかりである。そこで、本研究グループはアンダーグラウンドで展開した非公式芸術の諸ジャンルについて関係資料の現地調査･収集を行い、資料の分析をする。研究協力者のレートフとスホーチンは多数の非公式芸術家たちと交流があるので、現地調査のコーディネートおよびメールによる情報交換を行う。

（２）のグループは、旧ソ連諸都市（主にモスクワ、サンクト・ペテルブルグ、ヴィリニュス、アルハンゲリスク）とプラハ、ワルシ

ャワのジャズ・フェスティバル主催者やジャズ・クラブ関係者、非公式芸術家たちの地下ネットワークについて現地調査する。あわせてジャズ関係の音源資料の収集を行う。研究協力者の岡島豊樹はメロディアから出たジャズ・レコード約400タイトルのほぼ半数を所有しており、モスクワのジャズ批評家やレコード・コレクターとのつながりも深い。彼らへの聞き取り調査と共に、さらに音源を収集する。ギュスティスはヴィリニュス・ジャズ・フェスティバルの主催者であり、リトアニアのジャズ史を熟知しており、旧ソ連圏のジャズ関係者との広いネットワークを持っているので、それらの情報、資料を提供して頂く。木村英明（世界史研究所）は旧チェコスロヴァキアにおいて現地調査を行う。このグループ全員の調査研究によって、旧ソ連圏・共産圏における創造の場の発生、人的なつながり、各国間の芸術家同士の独自のネットワーク形成について明らかにする。

（３）のグループは、公式芸術と非公式芸術との関係について現地調査を行う。連携研究者の梅津紀雄は現代音楽の関係者について調査する。アカデミックな場にいた音楽家たちが地下で行っていた音楽実験と公式的な音楽表現との間の関係を明らかにする。生前のオブラスツォーフと交友のあった大井弘子（ビバボ人形劇）はオブラスツォーフ中央人形劇場他で現地調査を行い、まったく公式的な芸術であった人形劇の世界に非公式芸術家たちがいかに関与したかを明らかにする。研究代表者の鈴木正美はエストラーダやテレビの世界で働きながら地下で前衛的な音楽を探究した音楽家、挿し絵やデザインあるいはアカデミズムの世界で公の表現を行いながら、自分のアトリエで自由な表現を行っていた美術家等について現地調査する。このグループの研究は、公式と非公式の往還や境界の揺らぎ、半公式的な表現の方法や創造の場の発生について明らかにするのが目的である。

以上３つの研究はどれも密接に関係しているため、個別の研究だけではなく、各研究者の積極的な協力と共同作業が必要になる。各研究者は個別の研究のための現地調査を行うが、それぞれの研究成果をもとにお互いに報告しあい、各グループの共通項を検証しながら、非公式芸術とジャズ文化の関係を考察するための討論を重ねるよう年数回の研究会を行う。

海外研究協力者のレートフ、スホーチン、ギュスティスは、研究代表者である鈴木正美とすでに親しく接しており、本研究プロジェクトで大きな役割を果たす。ギュスティスはすでに平成20年2月に来日し、リトアニアのジャズ文化に関する講演を行い、関係資料を多数提供してくれた。また、これまでに行ったモスクワでの現地調査に際して、ロシアにおける非公式芸術運動を熟知する詩人ミハイル・スホーチンの協力は大きく、1960－80年代の非公式芸術家グループ「リアノゾヴォ」派の主要メンバーだったフセヴォロド・ネクラーソフへの聞き取り調査も行うことができた。音楽家セルゲイ・レートフは現在モスクワ・ジャーナリズム大学で現代音楽論を講じており、ロシアの音楽文化に関する膨大な量の論文を発表している。先のモスクワ滞在中もレートフから多数の資料を提供された。現地調査に際しては、この３名の協力が不可欠である。また、各人と鈴木正美とは電子メールによって頻繁に連絡をとりあっており、メール上での論議を重ねている。

４．研究成果

（１）2009 年度

①研究会の開催

鈴木正美は2010年3月26-27日、モスクワにおいて、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・研究成果について会議を行った。

②海外における現地調査

鈴木正美は2010年3月25日～30日、モスクワのヴィンザヴォート、ズヴェーレフ現代芸術センター等の他、複数の美術館、ギャラリーで非公式芸術に関する展覧会を実見し、資料収集を行った。また数名の非公式芸術家に聞き取り調査を行った。さらに文化センター「ドム」において前衛音楽関係者にも聞き取り調査を行い、あわせて貴重な音源資料の提供を受けた。また同行した研究協力者の岡島豊樹もジャズ文化関係の貴重な資料を大量に入手した。

（２）2010 年度

①研究会の開催

鈴木正美は研究協力者の岡島豊樹と共にサウンド・イメージ研究所において、研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」を2010年4月10日、2010年10月24日、2011年3月19日の計３回開催した。毎回一般公開で行われている本研究会には大学関係者のみならず、ロシア文化以外の領域を研究している人々が集まり、さまざまな視点から議論が交わされ、たいへん有益な情報交換がなされている。その結果はさらに次の研究へと活かされている。

また、鈴木正美は2010年5月7日−6月29日の約2ヶ月間のモスクワ滞在中に、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・研究成果について会議を行った。

②海外における現地調査

鈴木正美は2010年5月7日−6月29日の約2ヶ月間モスクワに滞在し、オブラスツォーフ国立アカデミー中央人形劇場において研究を

行い、約2,000点近い資料を調査・収集した。これによりソ連・東欧の人形劇の紹介に尽力した故大井数雄氏の足跡が明らかになりつつある。これら諸資料の分析および新たな資料の収集によって、人形劇を通じた日露間の文化交流の歴史の一端が開示される大きな可能性を得た。

この滞在期間中にモスクワのヴィンザヴォート・センター、ズヴェーレフ現代芸術センター等の他、複数の美術館、ギャラリーで非公式芸術に関する展覧会を実見し、資料収集を行った。また数名の非公式芸術家に聞き取り調査を行った。さらに文化センター「ドム」、クラブ「作曲家同盟」等において前衛音楽関係者にも聞き取り調査を行い、あわせて貴重な音源資料の提供を受けた。

中央人形劇場やクラブ「作曲家同盟」等の関係者と知己を得たことは、今後の研究の大きな助けになるだろう。

（３）2011 年度

①研究会の開催

鈴木正美は研究協力者の岡島豊樹と共にサウンド・イメージ研究所において、研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」を2011年12月11日、2012年3月10日の計２回開催した。第１回研究会ではセルゲイ・レートフに、第２回研究会ではアレクセイ・アイギに公開インタビューを行い、新たな知見を得ることができたのは、大きな収穫であった。

2012年3月16日−21日のモスクワ滞在中に、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・研究成果について会議を行った。また、本研究課題の最終成果として、2011年12月3日、新潟大学で国際シンポジウムを開催し、連携研究者の梅津紀雄、研究協力者のレートフ、岡島豊樹、木村英明が研究報告を行った。これらの報告は2012年度中に研究報告集にまとめる予定である。

②海外における現地調査

鈴木正美は2012年3月16日−21日モスクワに滞在し、文化センター「ドム」の創設者ニコライ・ドミートリエフの未亡人リュドミーラ・ドミートリエヴァに会い、聞き取り調査を行った他、ドミートリエフ関係の資料を大量に頂戴した。さらに、この間にモスクワのヴィンザヴォート・センター、トレチャコフ美術館新館等の他、複数の美術館、ギャラリーで非公式芸術に関する展覧会を実見し、資料収集を行った。また非公式芸術家の一人であったイリーナ・ザトゥロフスカヤに会い、聞き取り調査を行い、あわせて貴重な資料の提供を受けた。こうして日本では入手困難な貴重な資料を多数入手できたことは、今後の研究にとってたいへん有益である。さらに、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・研究成果について会議を行い、今後も本研究を継続・発展させていくことを確認した。

（４）研究成果の刊行

①本研究の研究成果をまとめた研究報告集を 2012 年度中に発行するため、現在編集作業中である。内容は次の通り。セルゲイ・レートフ「現代ロシアとポスト・ソビエト空間における非公式芸術とジャズ」および「ソ連邦、ロシア、およびソ連邦崩壊後の地域における新しい即興音楽：生成の歴史と現在の状況」、ミハイル・スホーチン「書かれた言葉がもつ二つの傾向について（具体詩に関して）」、梅津紀雄「ショスタコーヴィチとジャズ　組曲と劇音楽」、木村英明「グレーゾーンの文化―チェコスロヴァキア・ジャズのささやかな回顧」、岡島豊樹「1960 年代～80 年代に作られた旧ソ連におけるジャズ祭実況録音 LP レコードの中のジャズ」。これらにより、ソ連の非公式芸術とジャズ文化を通してみたロシア文化の特質の一端が明らかになることは確かである。

②多ジャンル融合研究グループの研究成果として鈴木正美は次の著作、論文を発表した。

a)鈴木正美「ロシア文化論――言葉の身体性とヴィジュアル・ポエトリー」（栗原隆編『人文学の生まれるところ』）。これにより、フェノロサの漢字論から現代詩におけるヴィジュアルな文字表現の歴史を概観し、ロシア文化史においてヴィジュアル・ポエトリーがいかに重要な機能を果たしたかが明らかになった。一般読者にも当該分野に対する関心が広がった。

b)鈴木正美「ヴォルガの視覚表象――絵はがきと風景写真、映画『ヴォルガ、ヴォルガ』から現代アートへ――」。ヴォルガが視覚的にどのように表象されたのか、19世紀末から現代に至る絵はがき、写真、映画、現代アート等、ジャンルと時代の異なる要素を領域融合的に分析した。ヴォルガ＝祖国というイメージが意識的に、また無意識的にいかに形成されたのかを明らかにすることで、従来のロシア・イメージとは異なる新しい視点が導入された。

③地下ネットワーク研究グループの研究成果として岡島豊樹は次の論文の他に、Web サイト（ブログ）「東欧ロシアジャズの部屋」http://jazzbrat.exblog.jp/　に多くの論考を発表している。

岡島豊樹「フォーク・ジャズ物語。ブルガリア、ルーマニア、モルドヴァ経由オデッサ行き」。ロシア・東欧における音楽文化の多様性を「フォーク・ジャズ」という視点から解き明かす。これまでのジャズ文化研

究の空白部分を埋める貴重な研究である。

④公式芸術と非公式芸術の横断研究グループの研究成果として鈴木正美と梅津紀雄は次の論文を発表した。

a) 鈴木正美「非公式芸術から百花繚乱の世界へ」（長塚英雄編『ロシアの芸術・文化』）。非公式芸術から現代アートへの発展について概観し、特に日本におけるこれらの芸術の受容についてまとめた。ロシア文化フェスティバルの総括として出版された一般読者向けの本の一節であり、当該テーマに関して広範な読者に寄与した。

b) 鈴木正美「1920-30年代ソ連のラジオにおける「声」――スターリン体制下のジャズと大衆音楽」および「1930年代のアレクサンドロフ監督のミュージカル映画における「声」――スターリン体制下のジャズと大衆音楽（２）」。非公式芸術とジャズ文化の発端となる1930年代の大衆音楽文化について論じている。当該テーマについては日本における先行研究がほとんどないため、今後も継続して論文を発表する予定である。

c) 鈴木正美「音楽産業下のロシア・ジャズ」および「現代ロシア詩遠望」。非公式芸術以降の現代ロシア・ジャズおよび現代詩に関して概観した。ソ連時代のアンダーグラウンド文化、前衛芸術の伝統が現在も生きていることを明らかにした。

d) 鈴木正美「С флейтой в руках о театре Но.」。日本の伝統芸能とロシアの詩（チュッチェフ、マンデリシュターム）の類似性についてアニミズムという視点から述べた。人形劇専門誌に掲載されたことで、ロシアの演劇関係者にささやかながらも影響を与えたと言える。

e) 梅津紀雄「音楽のジダーノフ批判はいかに起こったか--討論会記録にみるそのプロセス」。公式芸術と非公式芸術の分裂の発端といも言うべきジダーノフ批判について再検討した重要な論考である。

f) 梅津紀雄「ショスタコーヴィチ・交響曲第15番を読解する」および「ショスタコーヴィチとロシア革命：作曲家の生涯と創作をめぐる神話と現実」。著者の専門であるショスタコーヴィチについて先行研究を乗り越える新たな論を展開し、当該研究分野において高く評価された。

g) 梅津紀雄「ストラヴィンスキーと冷戦　彼のバレエ音楽はいかに自律したか」。公式芸術と非公式芸術の中間領域とも言える音楽の一面に関する優れた論文である。

h) 梅津紀雄「Oriental Elements in Russian Music and the Reception in Western Europe: Nationalism, Orientalism and Russianness」。ロシア音楽におけるナショナリズムとオリエンタリズムというきわめて困難なテーマに挑んだ意欲的な論文である。非公式芸術とジャズ文化の背景を考える上できわめて示唆に富んだ内容である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 鈴木正美、ヴォルガの視覚表象――絵はがきと風景写真、映画『ヴォルガ、ヴォルガ』から現代アートへ――、スラブ・ユーラシア研究報告集４「文化空間としてのヴォルガ」（北海道大学スラブ研究センター）、査読無、2012、139-155

② 鈴木正美、1930 年代のアレクサンドロフ監督のミュージカル映画における「声」――スターリン体制下のジャズと大衆音楽（２）、人文科学研究、査読無、第 130 輯、2012、59-76

③ 梅津紀雄、ストラヴィンスキーと冷戦　彼のバレエ音楽はいかに自律したか、シンフォニー、査読無、12月号、2011、16-18

④ 鈴木正美、現代ロシア詩遠望、ユーラシア研究、査読無、№44、2011、44-49

⑤ 梅津紀雄、ショスタコーヴィチとロシア革命：作曲家の生涯と創作をめぐる神話と現実、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、査読無、第18巻4、2011、97-113

⑥ 鈴木正美、音楽産業下のロシア・ジャズ、ユーラシア研究、査読無、№42、2010、3-7

⑦ 鈴木正美、С флейтой в руках о театре Но.、Театр Чудес、査読無、№3-4、2010、28-29

⑧ 鈴木正美、1920-30年代ソ連のラジオにおける「声」――スターリン体制下のジャズと大衆音楽、人文科学研究、査読無、第126輯、2010、35-56

⑨ 梅津紀雄、ショスタコーヴィチ・交響曲第15番を読解する、工学院大学共通課程研究論叢、査読無、第47-1号、2009、29-43

⑩ 梅津紀雄、音楽のジダーノフ批判はいかに起こったか--討論会記録にみるそのプロセス、東京国際大学論叢，経済学部編、査読無、第41号、2009、65-82

〔学会発表〕（計 1 件）

① 梅津紀雄、Oriental Elements in Russian Music and the Reception in Western Europe: Nationalism, Orientalism and Russianness、Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries、2010年7月8日、北海道大学スラブ研究センター

〔図書〕（計４件）

① 梅津紀雄、チャイコフスキー　組曲「眠れる森の美女」 ピアノ・ソロ版&連弾版（「解説」）、プリズム、2011。総 104 頁
② 鈴木正美、ロシア文化の方舟――ソ連崩壊から二〇年、野中進編、東洋書店、2011、（共著）総 408 頁（担当部分「ロシアのジャズ――今も続く芸術革命」、187-194）
③ 鈴木正美、ロシアの文化・芸術――ソ連崩壊 20 年後のロシアにける新しい傾向とロシア芸術の魅力の基本的特徴、長塚英雄編、生活ジャーナル、2011、（共著）総 454 頁（担当部分「非公式芸術から百花繚乱の世界へ」、196-211）
④ 鈴木正美、人文学の生まれるところ、栗原隆編、東北大学出版会、2009、（共著）総 359 頁（担当部分「ロシア文化論――言葉の身体性とヴィジュアル・ポエトリー」、67-89）

〔その他〕

① 鈴木正美、若い詩人の朗読会に活気非、北海道新聞、2011 年 2 月 1 日
② 鈴木正美、素材は身近な食材　独特の世界、北海道新聞、2010 年 11 月 2 日
③ 鈴木正美、旧ソ連の希望描いたデイネカ、北海道新聞、2010 年 8 月 10 日
④ 鈴木正美、人形劇で楽しむ音楽と世界平和、北海道新聞、2010 年 5 月 18 日
⑤ 鈴木正美、「非公式」芸術　豊かな遺産、北海道新聞、2010 年 2 月 16 日
⑥ 鈴木正美、自国のアニメ論も盛んに、北海道新聞、2009 年 11 月 17 日
⑦ 鈴木正美、高齢化進む非公式芸術家、北海道新聞、2009 年 7 月 21 日
⑧ 鈴木正美、ロック・スターの熱演に涙、北海道新聞、2009 年 4 月 21 日
⑨ ホームページ
Masami Suzuki’s Web Site
http://www.human.niigata-u.ac.jp/~masami/

６．研究組織

(1)研究代表者
鈴木正美（SUZUKI MASAMI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：１０３２６６２１

(2)連携研究者
梅津紀雄（UMETSU NORIO）
工学院大学・工学部・講師
研究者番号：２０３２３４６２

(3)研究協力者
①岡島豊樹（OKAJIMA TOYOKI）
スラブ・東欧音楽研究
②大井弘子(OOI HIROKO)
ロシア人形劇研究
③アンタナス・ギュスティス
（ANTANAS GUSTYS）
リトアニア・ジャズ研究
⑤ セルゲイ・レートフ（SERGEY LETOV）
ロシア・ジャズ研究。音楽家。
⑥ ミハイル・スホーチン
（MIKHAIL SUKHOTIN）
現代ロシア詩研究。詩人。
⑦ 木村英明（KIMURA HIDEAKI）
世界史研究所。
スロヴァキア文化研究。